

|          |                                  |
|----------|----------------------------------|
| 氏 名      | うちだ ひろあき<br>内 田 浩 明              |
| 学位(専攻分野) | 博士 (人間・環境学)                      |
| 学位記番号    | 人 博 第 153 号                      |
| 学位授与の日付  | 平成 14 年 3 月 25 日                 |
| 学位授与の要件  | 学位規則第 4 条第 1 項該当                 |
| 研究科・専攻   | 人間・環境学研究科 人間・環境学専攻               |
| 学位論文題目   | カントの自我論<br>——理論理性と実践理性の關係に留意して—— |

(主 査)  
論文調査委員 教授 有福孝岳 教授 安井邦夫 教授 小川 侃

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、カント哲学における自我論の諸相を、特に理論理性と実践理性の根源的關係に着目しつつ、解明しようとしたものである。この課題を遂行するために、申請者は、本論文において、単に批判期の主要著作のみならず、講義録、前批判期の諸著作、『オプス・ポストウムム』などを丹念に読み解き、独自の解釈を展開している。本論文は、以下の六章より成り立つ。

まず第一章「カントにおける二つの X」では、近世哲学にとりわけ特徴的な主観—客観の図式を拠り所に「超越論的对象」と「超越論的主体」という二つの「未知」なる「X」が果たして同じ意味で認識不可能と考えられるかどうかについて究明する。「超越論的对象」と「超越論的主体」を比較対照化することによって、両者の特性をまず確認し、次にカントの触発論に言及し、「超越論的对象」による触発と「超越論的主体」による触発（自己触発）の考察を通じて、やはり両者が未知的であることを追認する。

第二章「実体的自我から主体的自我へ—カントの自己認識論を手がかりに—」では、「前批判期」におけるカントの自己認識理論と「批判期」におけるカントの自己認識理論を対照させることにより、カントが「実体」的自我的認識を否定し、「主体」的自我的「作用的・機能的」特質に基づいた自我論を確立していった様子を浮き彫りにする。その際、申請者は、まず理論的主体としての超越論的統覚のはたらきを見定めたあと、本来の「主体」と言われるにふさわしい実践的主体について、超越論的統覚との異同を明らかにしながら、「実践的統覚」という観点から究明する。

第三章「カントにおける自由の実在性の問題」では、申請者は、カント哲学において自由の実在性がいかにして獲得されるのかを見定めるべく、『純粹理性批判』と『人倫の形而上学の基礎づけ』とでは「蓋然的」とされていた自由の理念が『実践理性批判』において客観的実在性を得るという事態を「理性の事実」の議論を手がかりに究明する。理念の定義に矛盾するように見える「自由の実在性が経験においても証明される」というカントの言葉を、「実践的経験」という観点を導入することによって、整合的に解釈しようとする。

第四章「カント実践哲学における感情の問題」では、申請者は、カント倫理学の中心概念の一つである自律との關係に留意しつつ、カントの実践哲学における感情の意義を見定める。その際、F・ハチスンにも言及する。なぜなら、「前批判期」の一定の時期まで、カントはハチスンの道德説に非常な関心を寄せており、カントの道德論の形成を発展史的に見るならば、「ハチスンは、カント倫理学にとってのヒューム」であると言われることさえあるほど、カントに影響を与えているからである。これを確認することによってカントの実践哲学における感情の意義が文献的にも明らかにされる。

なおここまでの各章の有機的連関について言えば、第一章と第二章は理論哲学から実践哲学への移行を意識しつつ議論を行っているが、第三章と第四章では実践哲学の領域に議論を移して、実践哲学上の問題を自我論的な観点から明らかにしようと努めている。これらは、いわゆる「批判期」のカント哲学に関する考察であるが、カントの自我論は、彼が晩年に書き残した『オプス・ポストウムム』において新たな展開を見せる。そこで続く第五章と第六章は『オプス・ポストウムム』に

考察の場を移し、更にカント哲学における自我の概念について究明する。

このうち第五章『オプス・ポストウムム』におけるカントの自己定立論では、第7束を中心に展開された自己定立論をカント哲学に内在的なものとして解釈することにより、自己定立論の意義を究明する。まず第一節を中心に『オプス・ポストウムム』における自己触発論が知覚との連関においてより具体的な仕方でも展開され、その延長線上に自己定立論があることを確認する。そしてその上で第二節以降、「自我（主体）が自己自身を客体として定立する」と定式化されるカントの自己定立論を、自我の「論理的活動」と「形而上学的活動」という二種類の定立活動の関係に配慮しつつ、解明する。

最終章の第六章は「カント最晩年の超越論哲学」というテーマのもとに『オプス・ポストウムム』のうちでも最後に執筆されたと考証される第1束を中心に、カントが最晩年に構想した「超越論哲学」について考察する。この束で構想された超越論哲学は「新たな超越論哲学」とも言われ、批判期の超越論哲学とは異なったものである。申請者は、まず批判期の超越論哲学の性格を確認した上で、それと対比しつつ『オプス・ポストウムム』における超越論哲学の特質を明らかにする。カントは『オプス・ポストウムム』の第1束において「超越論哲学の最高の立場」というそれまで語らなかった立場を表明しているが、その中心には「思惟する自我・主体」が据えられている。そのことにより、カント哲学における自我の重要性が改めて確認されることになるのである。

以上のような仕方と手続きによって、本論文は、カントの自我論を理論理性と実践理性との有機的体系的な連関と統一の観点から解明しようとしたものである。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文の基本姿勢は、カント哲学における自我論の諸相を、特に理論理性と実践理性の根源的関係を配慮しながら、解明しようとしたところにある。この課題を遂行するために、申請者は、本論文において、単に批判期の主要著作のみならず、講義録、前批判期の諸著作、『オプス・ポストウムム』などを舟念に読み解き、独自の解釈を展開している。

カントが「実体的」自我の認識を否定し、「主体的」自我の「作用的・機能的」特質に基づく自我論を確立していった様子を浮き彫りにする過程で、『純粹理性批判』と『人倫の形而上学の基礎づけ』とでは「蓋然的」とされていた自由の理念が『実践理性批判』において客観的実在性を得るという事態を「理性の事実」の議論を手がかりに究明しつつ、「自由の実在性が経験においても証明される」というカントの言葉を、申請者は、人間主体の実践的自覚（実践的統覚）としての「実践的経験」という観点から解釈している。同時に、本論文は、このように、主体性と実践性を強調し際立たせる一方で、人間の主体性における身体性の重要性和感情の不可欠性を浮き彫りにしている。これらの実践哲学的カント解釈は、申請者固有の優れた哲学的境地を切り開いている。

なおまた、各論文の単なる寄せ集めではなくて、一つの体系的有機的連関を形成している本論文は、第一章と第二章では理論哲学から実践哲学への移行を意識しつつ議論を行っているが、第三章と第四章では実践哲学の領域に議論を移して、実践哲学上の諸問題を自我論的な観点から明らかにしようと努めている。これらは、いわゆる「批判期」のカント哲学に関する考察であるが、カントの自我論は、彼が晩年に書き残した『オプス・ポストウムム』において新たな展開を見せる。そこで申請者は、第五章と第六章において『オプス・ポストウムム』に考察の場を移し、自我の「論理的活動」と「形而上学的活動」という二種類の定立活動の関係に配慮しつつ、カントの自己定立論を解明し、更には、カント最晩年の超越論哲学に着目しつつカントの自我論に新たな光を当てている。

カントの自我論に関して言えば、『オプス・ポストウムム』まで視野に入れたうえで、自我論について理論理性と実践理性の関係を特に意識しつつ解釈したものは、いまだ我が国の学会には見あたらない。また我が国で現在まで行われている『オプス・ポストウムム』の研究は自然科学的な観点からなされたものにすぎず、思惟する主体がカント哲学全体の中心に据えられる第1束に関する詳しい自我論的研究は殆ど行われていない。カント哲学において、自我が体系的な観点からも決定的な役割を果たすことを勘案すれば、理論理性と実践理性の根源的関係を顧慮して、『オプス・ポストウムム』における自我概念を解明した本論文は、我が国のカント研究の歴史において画期的な意義を持つものである。

ところで、カントが理論理性と実践理性の統一という問題を明確に語ったのは、『基礎づけ』の「序論」においてが初めてであるが、そこでカントは『第二批判』でこの問題が解決されると述べている。けれども、『第二批判』では理論理性と

実践理性の統一は、「将来への期待」とされ、ついに完遂されず、『第三批判』に持ち越されたのである。しかし『第三批判』の序論において、『第三批判』において理論理性と実践理性の統一が行われると言っているが、実際にはどこでそれが為されたのかは必ずしも明確ではない。ここにカントにおける理性の統一の問題が生じるわけであるが、この問題は、申請者が第六章で触れているように『オプス・ポストウム』における「超越論哲学の再定義」にまで連なるものである。そこに、「超越論哲学の最高の立場」としての「理性の統一」の問題解決の鍵が横たわっている。本論文の第五章と第六章で扱われた『オプス・ポストウム』のテキストはブントやコンマすら殆ど打たれていない読解が極めて難解な箇所を多く含んだものである。申請者は、困難なテキストの読解とその再構成に並々ならぬ努力と労力を費やすことによって、本テキストの解釈を果敢に遂行している。この点においても、申請者の不屈の研究意欲と開拓者精神は十二分に評価されるべきところであり、また、本論文は、テキストの厳密な分析と読解に立脚して、刮目すべき諸見解を披露することによって学会に寄与すべき具体的な成果を挙げるに至っている。

上記のように、我が国においてはほとんど未開拓な分野としての『オプス・ポストウム』の難解なテキストに対して、自我論についての透徹した理解を与えた本論文は、汗牛充棟の感があるカント研究に新境地を開いたものである。また、本論文は、人間・環境学研究科（人間・環境学専攻、人間形成論講座）の基本理念にもよく合致している。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成14年2月1日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行なった結果、合格と認めた。